名句が滑稽句に変身第二弾 ②

小林英昭

いかがでしょう。名句が滑稽句に変身しているでしょうか。うまくいっているのと、そうでもない句があるかもしれません。

名句　菫程な小さき人に生れたし　　夏目漱石

菫程な小さく生みて大きく育て

昔からよく言われる言葉。日本の少子高齢化はどうなるのでしょうか。戦争中は産めよ増やせよの標語がありましたが、標語だけでは解決しませんね。

名句　冬菊のまとふはおのがひかりのみ　水原秋櫻子

鯛焼のまとふはおのがゆげばかり

おじさんが袋に鯛焼を入れると、どっと湯気が立ちます。腹を割れば中からさらに餡子の湯気が噴き出します。子どもの時によく見たものです。

名句　涅槃図の前をこの世の猫通る　　松本澄江

涅槃図に猫の形のあとのこる

名句は、涅槃図の前を悠々と通る猫を描いています。その猫はどこから来た猫なのかは言っていません。変身句は、実はこの涅槃図から抜け出た猫なんですと種あかしをしているのです。

名句　全長のさだまりて蛇すすむなり　　山口誓子

体長をくねらせて蛇すすむなり

拙句に「わたくしのどこがいけないのかと蛇」があります。わたしは蛇が嫌いです。どこが嫌いなのかと問われてもとびぬけてこれというものがありません。総合的に嫌いなのです。

名句　鮟鱇の骨まで凍ててぶちきらる　　加藤楸邨

鮟鱇の捨てるとこなくしやぶる骨

冬は鮟鱇鍋がいい。まずはあん肝などを酒の肴にまず一献。とにかく鮟鱇には

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

捨てるところがないと言われています。だから鮟鱇は骨までしゃぶって食うのが作法って言うものです。

名句　人の世に花を絶やさず返り花　　鷹羽狩行

人の世に酒を絶やさず古酒新酒

大酒飲みの句です。ただいまはコロナ禍で、わいわいがやがやとは飲めませんが、それでも飲兵衛は飲むのです。

名句　指ゆるめ紫雲英の束を寛がす　　橋本美代子

握られて土筆の束のグロッキー

摘まれた土筆の束が、子の手に握られて疲労困憊してぐったりとしています。早く涼しいところで寛がせなければなりません。でももう立ち直れないかもしれません。

名句　山茶花は咲く花よりも散つてゐる　　細見綾子

山茶花の証にぱらと散つて見せ

椿と山茶花の違いは、花ごとぽとりと落ちるか、花びらがばらばらに散るかです。だから椿と山茶花を見分けるには、そこのところをチェックすればいいわけです。

名句　痰一斗糸瓜の水も間にあはず　　正岡子規

死水は糸瓜の水で間にあはせ

原句は、「糸瓜咲て痰のつまりし佛かな」「をとゝひのへちまの水も取らざりき」と合わせて有名な、絶筆三句の一つです。変身句は、子規さんのことだから笑って面白がってくれると思いますが、これはなんだ、あんまりだとお叱りをうけるかな…。生死にかかわることを滑稽句にするのは難しいですね。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。